

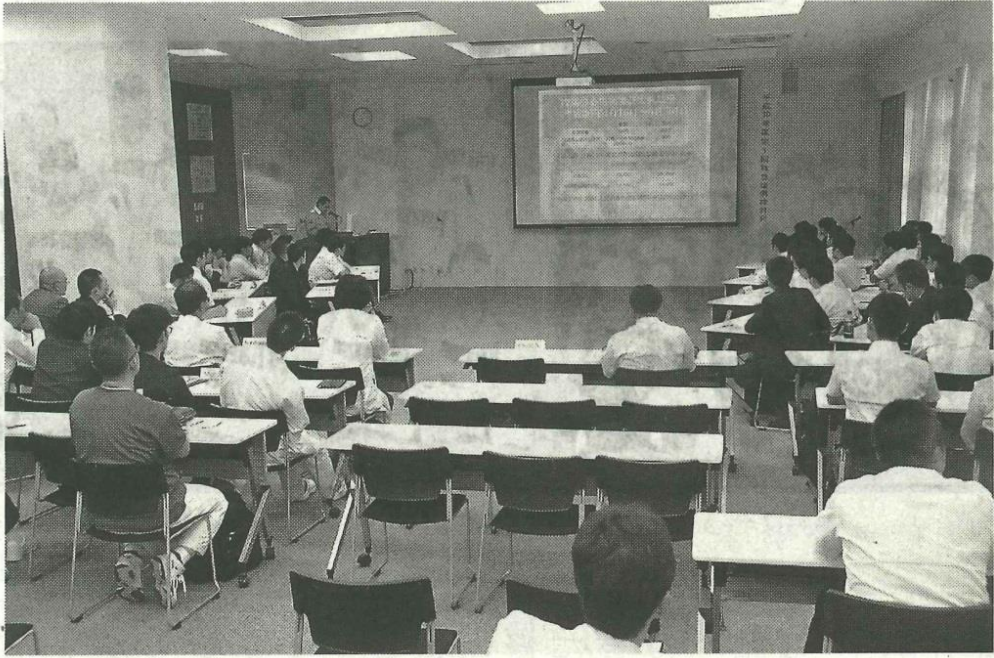
搬送中の心電図伝送システム使用

救急隊員ら意見交換

製鉄記念
室蘭病院

製鉄記念室蘭病院(前田征洋病院長)の救急症例検討会が、室蘭市知利別町の同病院で開かれ、心疾患の診断に不可欠な

「12誘導心電図のデータ」を救急搬送中に取得し、モバイルで医療機関に伝送する「12誘導心電図伝送システム」を用いて救



「12誘導心電図伝送システム」の運用状況などについて意見交換した救急症例検討会

急搬送された症例を中心に、救急隊員と同病院の医師らが意見交換した。同システムは、室蘭と登別両市の消防本部が、それぞれの救急車1台に設置。不安定狭心症や急性心筋梗塞などの「急性冠症候群」が疑われる患者の搬送を中心に用いている。

今年4月から試験運用(実証実験)を開始。7月1日には、両消防本部と循環器疾患の大半を受け入れている同病院が、「同システム設置及び運用に関する協定」を締結。現在は本格的に運用している。

7月25日に開かれた救急症例検討会には、室蘭、登別、西胆振、白老各消防の救急隊員や、同病院の医師ら約80人が参加。室蘭、登別両市の消防本部が、同システムの試験運用の状況などについて報告した。

室蘭市消防本部の八木

伸幸さんは、4月16日、6月30日の急病による出動件数(計251件)のうち、36件で同システムを用いたところ、「現場滞在時間、搬送時間ともに早かった」と説明。
「12誘導心電図の重要性から、早期搬送につなげることで(病院到着から冠動脈の血流を再開させる治療までの)ドア・トゥ・バルーンタイムの短縮に努めようとする意識が高まった」とする効果も示した。

また、登別市消防本部の竹谷貞治さんは、頭痛と吐き気、胸痛を訴える80代男性の搬送時に、システム活用によって、顕著な変化を確認できたなどとする例を紹介した。

一方、同病院の高橋弘循環器内科科長は、救急隊プラス医師、看護師、放射線技師、生理検査技師、臨床工学技士による「ハートチーム」が、同システムの活用で、より一層一体化される一と強調。前田病院長は、「将来的には(西胆振行政事務組合消防本部と白老町消防本部への配備、室蘭と登別両消防本部への増設を検討したい」と説明した。
(松岡秀宜)